

令和6年度 府立峰山高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（ 実施段階 ）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
【スクール・ミッション】 機械創造科・普通科を設置する高校として、大学や地域の関係機関との連携を深め、郷土を愛する心と質の高い学力、グローバルな世界で活躍できる国際感覚を身に付けることによって、創造力豊かに社会に貢献できる人材を育成する。 【スクール・ポリシー】 ○真理を求める力 「学びを究め、個人と社会の幸福を考え、実現する力の育成」 ○変化する力 「自ら成長し、互いに反応し、高め合う力の育成」 ○織り成す力 「一人一人の個性を認め合い、経緯^{たてよこ}に交わり、未来社会を創造する力の育成」	【成果】 ① 下校時刻の繰り上げ等もあり、教職員の時間外勤務時間の縮減（前年度比9%減） ② 無線LANアクセスポイントの増設や壁付け扇風機の設置など学習環境の改善 ③ センサーライトや防犯カメラの設置等、より安心安全な学校づくりを推進 ④ 当初計画通りに人権に関わる生徒の学習や教職員研修を実施 ⑤ 保護者等向け広報誌の定期的な発行による学校理解の促進 ⑥ いさなご探究や課題研究等での外部の人や組織と連携した教育を実施 ⑦ 学校のきまり等の確認や検討を実施 【課題】 ① 生徒募集につながる効果的な広報 ② 大学連携や地域連携等に取り組むための新たな体制づくり ③ 生徒と協働した学校のきまり等の確認や検討 ④ 1、2年次における進路指導の充実 ⑤ 生徒会活動や部活動の活性化 ⑥ 京丹後市と連携した学びの継続 ⑦ 普通科と機械創造科が連携した教育活動の推進	1 質の高い学力を備え、社会を生き抜くために必要な資質・能力を育成する。 ・個別最適化の学習を進めるため、iPad等を効果的に活用する。 ・希望の進路を実現に向けての学習を前向きに取り組めるように、1、2年次の進路指導を充実させる。 ・主体的な学びができるように、魅力ある学校施設の整備を進める。 2 高大連携や地域連携等を通して、いさなご探究や課題研究などの充実を図り、STEAM教育の手法を用いて、新たな価値を創造する力を育成する。 ・STEAM教育等を進め、京丹後市と連携した学びの継続を推進する。 ・大学連携や地域連携等に取り組むため、京丹後市未来チャレンジ交流センター等とさらに連携を進める。 ・探究活動等で、普通科と機械創造科での連携を進める。 3 充実した学校行事等を通して豊かな人間関係を築き、互いに高め合いながら、地域や国際社会で幅広く活躍できる力を育成する。 ・豊かな人間性を築くため、生徒会活動や部活動を活性化させる。また、それらの活動を効果的に広報し、生徒募集につなげる。 ・生徒とともに学校のきまり等の確認や検討を進める。

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
組織・運営	○教職員の意識改革による働き方改革の推進	○情報共有の更なる効率化を図るとともに、会議等の内容や進め方を見直し、時間外勤務時間を減らす。 【前年度比10%減】 ○下校時間を意識しながら、部活動の効率化を推進する。	B	B	○生徒完全下校時間の遵守、時間外勤務時間の削減は進みつつあるが、特定教職員の時間外勤務時間の長さが課題である。 ○ICT活用による作業の効率化は進んでいる。 ○広報については、各媒体を通じて本校の取組、特色、生徒の校内外の活動などを、幅広く広報することができた。一方で、広報の定量的な効果の測定手法について検討したい。
	○教育環境や職場環境の更なる充実	○生徒・教職員の主体性、創造性を十分に引き出せるよう、ICT環境等の整備に努め、作業効率を高める。	A		
	○中学生等への計画的な広報活動	○ホームページ・紙面・動画・プレゼン等を効果的に活用し、本校の取組、特色、生徒の校内外の活動などを、幅広く広報する。	B		
学習指導・進路指導	○主体的に学習できる生徒の育成	○各教科・学年と連携して、計画性のある自主学習を推進する。【自主学習時間1日平均2時間以上】 ○各学年・分掌との連携を十分に行い、希望進路の実現に向けて生徒の主体的な行動を促す。 【国公立大学合格者延べ50名以上、就職内定率100%】	B	B	○自主学習時間調査の平均は平日2時間3分、休日3時間15分であったが、自主学習の質の向上に向けて指導していく必要がある。 ○来年度開設の科目「STEAM探究」に向けて教材を準備。2学期より普通科で試験的授業を実施した。 ○国公立大学校推薦型・総合型選抜に向けて受験希望生徒に担当教員を付け、個別指導を行った。 ○就職試験に向けて校内模擬面接や外部の方々を招いた面接指導を行った。
	○STEAM教育の推進	○STEAM教育を取り入れた授業を実施し、機械創造科と普通科が連携した学びの機会を設ける。	B		
生徒指導・特別活動	○規範意識の向上	○身だしなみ（頭髪・服装）を整え、落ち着いた学習環境をつくる。 ○危機管理意識の向上に取り組む。	B	B	○日々の声かけにより身だしなみに関しては概ね良好である。学習環境に関しては1学期に課題がある学級も見られたが学年・教務・生徒指導部での連携した指導により解消し、良好な状態を保っている。 ○1年生の部活動加入率は79.2%と例年に比べ低調であり、全学年加入率は昨年度の84%を下回った。文化系部活動への加入者減が影響していると考えられる。定着率については有意差はなく、維持していきたい。 ○生徒会活動は執行部員の活躍により、委員会と連携をとりながら活発に行うことができています。
	○生徒の自主的な活動の活性化	○部活動加入率と定着率を向上させるとともに、学習との両立ができる環境を作る。 ○生徒会と委員会が連携した活動を行う。	B		
健康安全・教育相談	○健やかな心身の育成と環境づくり	○生徒保健委員を中心に生徒が主体となった美化活動の推進。 ○食育だよりの発行などを通して食への関心を高め、自己の食生活を振り返り自立への後押しとする。	B	B	○クリーンプロジェクト3回実施。保健委員美化担当が中心となって重点目標を決め、実施できた。 ○地域の方にお世話になり食育講座として調理実習を実施した。 ○教育相談アプリを活用してSCにつなぎ、心のケアを行うことができた。
	○教育相談の充実	○アプリ等のツールによる予約チャンネルを活用し、気軽に教育相談を受けられる環境を作る。	B		

		○教職員対象の研修会をおこない、支援のスキルアップを図る。			○同時双方向型遠隔授業実施に向け体制を整え実施することができた。 ○特別支援教育の実施に向け、教職員研修会を実施することができた。
家庭連携・地域連携	○教育活動等の保護者等への情報発信の充実	○ホームページや広報誌、連絡用アプリ等を有効に活用し、保護者等との連携を密にする。	B	B	○「科学・人文科学の教室」、「探究報告会」等で大学教員、大学院生、学部生に来ていただいた。交流センターrootsの相談員にも探究の授業に来ていただき、地域人材との繋がりを積極的に作った。
	○大学や地域の関係機関及び地域の方々等と連携した教育活動の充実	○大学の教員や地域人材から学ぶ機会を積極的に設けたり、案内したりする。	B		
人権教育	○教職員・生徒の人権意識の向上	○人権をテーマとした教職員研修を実施し、人権意識の向上を図る。 ○すべての教育活動を通じて、生徒の自尊感情を高め、他者の人権を尊重する態度を涵養する。	A	A	○人権意識の向上に向けて、計画的かつ継続的に研修が実施できた。 ○講演会等の人権学習後の感想文によれば、生徒の人権意識の高まりがうかがえた。
		○生徒が相互に人権を尊重する意識を涵養する。	A		

評価 A：達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった

学校関係者 評価委員会 による評価	・「働き方（時短）」だけを求めるよりも、「働き甲斐」とのバランスも考えながら働き方改革を進めるべきである。分掌を超えた協力関係、若手教員にも裁量を持たせることで「働き甲斐」を高める本校の体制は評価できる。 ・教員も生徒もうまく ICT を活用し、定着している。 ・挨拶もしっかりでき、身だしなみも整った生徒たちである。最近の若者たち、子どもたちの変化が気になり心配する面があったが、峰山高校の生徒の様子、学校での指導内容を見ていると安心できる。 ・自分たちで考え、校則、ルールを変えていこう、という生徒会の動き、民主主義を体験させることは素晴らしい。 ・キャリアカフェ、ストリートカフェの整備など、生徒のコミュニケーションの機会を設定する仕組みづくりに工夫があり、その成果が出ている。また、早朝から完全下校時間までのエアコン稼働など、生徒が体力を維持し、快適な学校生活を送ることができる環境を作っている。 ・送迎車の乗り入れ可とするなど、保護者のニーズに柔軟に対応する姿勢は高く評価できる。 ・学校生活に対する肯定的な声を地域の子どもたちから聞く。PTA 会報の写真に、その楽しさや一体感が表れており、学校の様子がよくわかる。生徒の一体感を高めるため、PTA の補助で学校祭向けの T シャツを作るなど、斬新な取組が評価できる。 ・現状に甘んじず、常に改革・改善をすすめ、府立高校のトップランナーたれ、という学校全体の気概がよい。
-------------------------	--

次年度に 向けた改善の 方向性	・部屋によって温度の差、空調の効きにくさがあるのは課題であるので、継続して施設設備の改善を図っていく。 ・探究や課題研究の内容、峰高展等の学習成果発表は非常に素晴らしい内容である。この成果発表を、もっと地域に開放し多くの人に見てもらうなど、校外にもアピールしていく。開かれた学校となるよう、学校の活動をより外向けに発信し、地域創生に資する形にしてい - く。地域コーディネータを仲介役とし、今後も地域とのつながりを深めていく。 ・SNS 等の使い方では、被害者にも加害者にもならないリテラシー教育が必要である。これらを教科指導、特別活動の中で進めていく。
-----------------------	--